
ポケモン不思議のダンジョン 絆の探検記

凜月波音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモン不思議のダンジョン 絆の探検記

【Nコード】

N 3 4 5 6 W

【作者名】

凜月波音

【あらすじ】

目が覚めたらピカチュウになっていた少年ユウキと、海岸でユウキが出会ったイーブイのカノン。二匹は探検隊を結成する。これは、とある探検隊の奇妙で壮大な冒険を綴った物語。

プロローグ

ここは、どこなんだろう？

少年は唐突にそう思った。

上下の感覚はとっくに消失しているが、不思議と心地良い。

だがその時、いきなり強い力で振り回されるような、不快な浮遊感に襲われた。頭がくらくらして、さっきから辛うじて繋ぎ止めていた意識の糸が途切れそうになる。少年は咄嗟に全身に力を込めて意識を繋ぎ止めようとするが、限界はすぐにやってきた。

もう……駄目だな……

少年が全身の力を抜くと同時に、少年の意識もスイッチを切るように途切れた。

「う……？」

目が覚めて、少年は自分が海岸らしき場所にいることを悟った。

「……うん……」

頑張つて身体を起こそうとするが、目の前がちかちかしてすぐに地面に倒れてしまう。仕方なく少年は立ち上がることを諦め、再び目を閉じた。

プロローグ（後書き）

こんにちは、凜月波音^{りんつきはのん}です。もしくは駄作者ともいいます。

更新は不定期ですがテンションが高いとペースがなんか急に速くなった……りするかどうかは分かりませんごめんなさい。orz
趣味で亀更新の癖に感想書いていただけると飛び上がって喜びます
嬉しいのも優しいのもおーるうえいずで受け付けております。

では、どうかこんな駄目人間を生温かい目で見守ってやってください（笑）

第1話 海岸の出会い（前書き）

時間がベースなのにイーブイが出てくるのは

・ 作者がイーブイ大好き

・ なのに空をプレイしていない

これが原因です……許してやってくださいお願いしますorz

第1話 海岸の出会い

「はああああ……」

夕陽色に染まったプクリンのギルドの前で、一匹のイーブイが大きく溜息をついた。ウサギのような形の耳とさぞかし触り心地の良いであろうシツポも、一緒にてろんと垂れる。

「今日も駄目だったなあ……ううう、どうすればいいんだろ……」

やがてぷるぷると身体を震わせると、イーブイは呟いた。

「よし、明日出直す。今度こそ……二十五回目ってなんかキリがいいし。きっと上手く……いったら、いいなあ……」

その後、自分の住处に帰るつもりが、イーブイはいつの間にかギルドの南西にある海岸に来ていた。

「わあ………」

そこに広がる景色に、思わず感嘆の声を漏らす。

夕陽の元々の美しさに加え、海岸に生息しているクラブの吹く泡と海が夕陽を反射し虹色に輝いていて、幻想的な風景を作り出していた。

「こんなに綺麗なのは久し振りに見たよ……ん？　なんだあれ？」

岩の陰に、何やら黄色い物体が転がっていた。駆け寄ってみると、

「え……？ ってこれ、ピカチュウ？ しかもなんか……息してないよ！？ ええええ！？ ちょっとどうしょ！？ 誰か、そこら辺に仲間とかいないの！？」

イーブイが一匹でパニックに陥って叫びまくっていると、件のピカチュウがもぞもぞと動いた。そして、「ん……」と呟きながら目を開ける。だが、イーブイはそれに気づかずまだ叫んでいた。

「えー！？ ちょっとそれじゃボクが疑われちゃうよ！ ほら何だっけ、えーとその……そう！ 第一発見者って疑われるじゃない！ やだよ、ジバコイル保安官に職質されちゃ……あれ？」

ようやく気づいた時には、ピカチュウは可哀想な人でも見るかのような眼差しでイーブイを見ていた。

「……あれ？ お、起きてたの？ 起きてるなら、さ、起きてるって言うてよ……寿命が縮んだよお」

「……………」

叫んでる姿があまりに哀れで声をかけるのがためられました、とは言えなかった。

「……んー、まあ……いいか。で、お前、誰？」

「誰とは失礼な……。ボクはカノン。自分のことボクって言うてるからよく間違えられるけど、だよ。ちなみにイーブイの平均より少々小さめサイズ。君は？」

「声で分かるだろ、普通。んで、俺はユウキ……まではいいんだが」
「が？」

「誰かさんのせいで驚くタイミングを掴み損ねたんだが、俺はニンゲンのはずなんだよ。内心かなり吃驚してるんだけどさ、誰かさんのせ」

「それはいいとして、何、元ニンゲン？ そんなの聞いたこと無いけど？ ううん、もしかしてボクを騙そうとしてる？ でも無駄だよ、ボクは金持ちじゃないもん」

「騙すためにそんな突飛な言い訳をする詐欺師がどこにいんだよ、お前にすらあからさまに疑われてんじゃないかねえか」

「うう、それもそうだな。……で、これからどうするつもり？」

「どうするって…どうしようもねえよ。そもそもまだ自分がポケモンになったことすらよく分かんねえしさ」

ユウキはそこで言葉を切り、空を見上げる。遠くにキヤモメの群れが見えた。

「うーん………あ！ そうだよ、それがいいよ！ けってーっ！」

「いや、一人で決めるなよ。俺は何も分からんぞ」

「うん！ あのね、」

カノンは満面の笑みで、右前足をユウキにびしっと突き出す。

「ボクと一緒に、探検隊やればいいんだよ！」

「……………はい？」

「聞こえなかった？ だから、ボクと探検隊やろうよって言ってるの。プクリンのギルドに弟子入りすれば住み込みで働くことになるし、ご飯もギルドで出るし。あそこはちょっと怖いけど……………でも、なんかユウキと一緒になら何とかなる気がするんだもん！ だから、ね？ 探検隊やろ？」

「……………まあ、いいけど……………」

「やったあ！ ユウキありがとうー」

ユウキは飛び跳ねながらシッポをピコピコ振っているカノンを尻目に、そんな風に見つめられたら何も言えませんが、と誰にも聞かえないように呟いていた。

第1話 海岸の出会い（後書き）

最初から読みにくいですね…ごめんなさい（汗

とりあえず、基本原作通りでちょこちょこオリジナルを入れたいな
と思っております。

こんな駄文しか書けない駄作者ですがどうぞ宜しくお願いします。

カノン「ねえ凜月、夏休みの宿題、まだ結構残ってるよね？」

うぐ。なんでそれを知っててなおかつそこにいるんだ……

カノン「調べ物してたのに、気がつく小説読んでるんだもん。分
かるって。さて、まだやらないようならお仕置きしないと……」

すいませんでしたああ（逃

第2話 プクリンのギルドにて

二匹は海岸を離れ、プクリンのギルドの前にいた。どうやらこのギルドに弟子入りして、探検隊修行をするつもりらしい。

プクリンをかたどった屋根はどう見ても「ようこそ!」と言っているようにしか見えないのに、入り口は厳めしい鉄格子で閉ざされている。おまけに足元には、木で出来た謎の格子がはまっていて、ユウキにはそれが入ろうとする者の恐怖を煽っているようにしか見えなかった。

(うーん、何と言いますか……強いて言えば悪趣味、ってどこか)

プクリン型の建物という、自分の常識の中には無かった物をユウキが呆れたような顔で見ていると、

「ユウキ……先入って……」

「ヘタレかお前は!」

「はい。ヘタレです」

「認めたっ! こいつ認めたし! しかも探検隊がヘタレっていささか問題ありだぞ!」

「うう……」

「しゃーないな、先入ってやるよ。ユウキ様は優しいから」

「自分で言うか普通……？」

ぎゃんぎゃん騒ぎながら、ユウキはそろりと格子の上に足を乗せる。見た目とは裏腹にかなり丈夫に出来ているらしく、ユウキが乗ったくらいでは音を立てることすら無かった。ふう、と溜息を漏らして安心したのも束の間、今度は足元から聞こえてくる声に驚かされる羽目になる。

「ポケモン発見！ ポケモン発見！」

「誰の足型？ 誰の足型？」

「足型は……えーと……足型はあ……あ！ 多分ピカチュウ！ 多分ピカチュウ！」

「多分って何だ多分って！ はっきりしろ！」

「だってピカチュウとかこの辺にいないし……分かんないですよ」

「確かにこの辺じゃ見かけないが……まあいい。もう一匹いるな？ そこに乗れ」

ユウキが退くと、カノンはおそるおそる足を乗せる。心なしか震えているようだ。

「ポケモン発見！ ポケモン発見！」

「ひゃう！」

カノンが変な悲鳴を上げた。だが足元の声はそんなことは気にも

留めず、やりとりを続けている。

「誰の足型？ 誰の足型？」

「足型はイーブイ！ 足型はイーブイ！」

「よし、入れ！」

「え？ 入れって、閉まって……」

カノンが言いかけると、突然地響きがした。驚く二匹をよそに、
ががががと鉄格子が開いていく。

「……………」

「……………まあ、入るか」

ユウキは建物に入るだけでこんなに驚かされなきゃいけないのか
この世界は、と呟いてギルドの入り口をくぐる。カノンも慌ててそ
の後に続いた。

二匹が梯子を降りていくと、そこにはカラフルな鳥が待っていた。
頭は音符の形をしている。

「ああ、さっき入ってきたピカチュウとイーブイはオマエたちのこ
とか？ ワタシはペラップ。プクリン親方の一番の子分であり、ギ
ルドーの情報通だ。勧誘やアンケートならお断りだよ、ほら帰った
帰った」

「違うよ！　ボクたち探検隊になりたくて、弟子入りしに来たんだよ！」

門前払いを食わされかけ、カノンがペラップに猛抗議する。

「なっ！？　で、弟子入り…だと!？」

（今時探検隊になりたいなんていう輩なんて滅多にいないよ、寧ろ最近脱走しようとする奴も多いというのに、なんて物好きな奴らなんだ……）

「おいペラップ、ここの修行ってそんなに唸るほど厳しいのか？」

「そ…そそそそんな訳無いじゃないか　ギルドの修行はとーっても楽ちゃん　弟子入りしたいならさっさと言えばいいのに、さ、行くよ」

態度を一瞬にして豹変させたペラップだった。

「何やってんの？　ほら早く早く」

そして二匹を置いて、一匹で梯子を降りていってしまふ。

二匹は顔を見合わせ、ペラップの後を追った。

第2話 プクリンのギルドにて（後書き）

ユウキの記憶喪失は、何もかも忘れているのではなく人間だったときの思い出を忘れていただけなので、前の知識などはある程度覚えていきます。

第3話 探検隊“カノープス”結成！

「ここはギルドの地下二階。主に弟子たちが働く場所だ。チームの登録はこっちだよ。さあ」

ペラップはそう言うときまた歩き出し、あるドアの前で止まった。

「さて、ここが親方様の…」

「わあ！　ねえユウキ、ここ地下二階なのに外が見えるよ！」

「ワタシの台詞を遮るんじゃない！　そしていちいちはしゃぐな！」

怒鳴られて、カノンはしゅんと耳とシッポを垂らす。

「このギルドは崖の上に立っているから外が見えるんだよ。さあ、ここが親方様の部屋だ。くれぐれも粗相の無いようにな」

ペラップはしっかりと釘を差すと、そうつとドアを開けた。

「親方様……。ペラップです。入ります」

部屋に入ると、一匹のポケモンが入り口に背を向けて立っていた。ピンク色で、ウサギのような耳がついている。

「親方様。こちらが新しく弟子入りを希望している者たちです」

ペラップがそう告げる。が、いつまでたってもプクリンは振り向くどころか微動だにしない。

「親方様……………親方様？」

（こいつ……………寝てんのか？）

ユウキの頭の上を疑問符が旋回し始めた時、突然プクリンが振り返った。

「やあっ！　ボク、プクリン　　このギルドの親方だよ？」

「……………」

しばしの沈黙が流れたのにも構わず、プクリンは続ける。

「君たち探検隊になりたいんだって？　じゃ、一緒に頑張ろうね！」

どうやらとてもフレンドリーなお方ようだ。

「えーと、とりあえず最初に探検隊のチーム名を登録しなきゃいけないんだよね。君たちのチーム名を教えてください？」

「チーム名？　考えてなかったな……………カノン、何かあるか？」

「……………カノープス。ボクの一番好きな星の名前なんだけど……………いいかな？」

「ああ。オツケーだ」

「じゃあ“カノープス”でいいね？　リーダーは誰？」

「ユウキです」

「え！？　ちょ、おい……」

「決まりだね　　とうろく　　とうろく　　みんなとうろく……」

「オマエたちっ！　何も言わずに耳を塞げっ！」

ペラップが必死の形相で叫んだ。ほぼ条件反射的に二匹は自分の耳をガードする。

「たあーーーーー……」

突然、超破壊力のハイパーボイスが飛来した。耳を塞いでいても鼓膜が破れてさらに吹っ飛ばされそうだが、二匹は何とか耐える。

（ぎ、ギルド全体が揺れてるっばいし上から何かぼろぼろ落ちてくるぞ……有り得ん）

ユウキは衝撃波に必死に耐えつつ、そんなことを考えていた。

やがてハイパーボイスが止んで、衝撃波と地震もぴたりと止まる。さっきまで騒がしかった外がなぜか急に静まり返っていた。

「おめでとう！　今日から君たちも探検隊の仲間入りだよ　記念にこれをあげるよ」

だが当の本人は何事も無かったかのようにどこからか箱を取り出してくる。そして、ユウキの前に置いた。

「さ、開けてみて」

言われるままに箱を開けると、布製の何かや紙などが詰まっていた。

「わあ〜！ 色々入ってる！」

カノンがはしゃいで、箱からそれらを出す。プクリンが一つずつ指差して言った。

「まず、それは探検隊バッジ。探検隊の証で、救助したポケモンをダンジョンから脱出させたり自分たちが脱出することも出来るんだ。その紙は不思議な地図。とっても便利な地図だよ。そして最後にトレジャーバッグ。ダンジョンで拾った道具を入れておけるんだよ。あと、トレジャーバッグは君たちの活躍によって、だんだん大きくなっていくという……とても不思議なバッグなんだよ」

嬉しそうに探検隊バッジを眺めているカノンを、これまた嬉しそうにプクリンは眺めている。

「ん？ トレジャーバッグの中に何か入ってるぞ？」

「あ、そうそう、その中に入ってるのはパワーバンダナとキトサンバンダナ。それぞれ身に着けると、攻撃と特防が上がるバンダナだよ。きつと君たちの冒険に役立つと思うよ」

「あ、ありがとうございます！！ ボクたちこれか #」

「……俺たちこれから頑張ります」

興奮しすぎて台詞を噛んだカノンを、ユウキが何とかフォローする。

「うん。でもまだ見習いだから頑張って修行してね」

「はい！ ユウキ、頑張ろうね！！」

「ああ！」

その後。

二匹はペラップに連れられて、一番奥の弟子部屋にいた。

「ここがオマエたちの部屋だ」

「あ！ ベッドだあ！」

ばふ、とカノンが藁のベッドにダイブした。藁が二、三本宙を舞う。

「これからオマエたちには住み込みで働いてもらう。明日から忙しいぞ 早起きもしなきゃいけないし、規則も厳しい。もう夜遅いから、夜更かししないでちゃんと寝るんだぞ じゃあな」

ペラップはそう言い残して去っていった。

ユウキは脇でまだ藁のベッドと戯れているカノンをちらっと見ると、自分もベッドに潜り込んだ。藁のベッドも、意外と悪くない。

「あ、ユウキもう寝る？」

「俺は寝る。疲れたしな」

「じゃあボクも。お休み」

「お休み」

二匹の会話が切れると、途端に静寂が部屋を支配する。外からわずかにホーホーの鳴き声が聞こえていた。

「……………ねえ、ユウキ。まだ起きてる？」

「……………」

ユウキは実はまだ起きていたが、敢えて寝たふりを選択する。

「あ、もう寝ちゃったのかな…？ まあいいや。…………ボク、今日はずっとドキドキしてたけど、やつぱここに来てよかったな。プクリン親方も意外と優しくそうだったし…………」

カノンは少し言葉を切り、続ける。

「明日から色々ありそうな予感はあるけど、そんなに怖くないんだ。それどころか、これからどんな冒険があるのかなって、楽しみなくらい。それに…………ボクにはさ、…………ユウキがいてくれるから。一匹じゃ怖いかもしれないけど、二匹なら…大丈夫だと思うんだ」

さすがに限界なのか、カノンはふああ、と小さな欠伸をした。

「ふああ……。眠くなってきた……。じゃあ、明日から頑張ろうね……。お休み、ユウキ……」

少し経つと、カノンは規則的な寝息を立て始めた。カノンが寝たことを確認して、ようやく身体の力を抜く。

（なんだかんだであつという間にギルド弟子入りしちゃったよな……確かに探検隊とかいうのも楽しそうだが、それよりなんで俺は……ポケモンになっちまったんだ？）

しばらく考えてみたが、やはり何も分からなかった。ユウキも欠伸をして、寝返りを打つ。

（まあ、分かんねえものは今考えたって同じだしな……。とりあえず、明日もあることだし寝るとするか）

やがて、ユウキも規則的な寝息を立て始める。

こうして、初めてのギルドの夜は更けていった。

第3話 探検隊“カノープス”結成！（後書き）

カノンの台詞が書いていて少々恥ずかしくなりました

カノン「凜月、何か言ったあ？」

いえ何も（ニコリ

カノン「フフフフフフ……」

え！？　なんでそこ、攻撃態勢！？　しかも目が逝ってるよ！？
闇カノン降臨はまだ時期的に早いと思うk（ふぎやああああああ
ああああ

ユウキ「宿題終わってないのにいいのかそんなことしてて」

しゅ……、シューマイが食べたいなあっ！（汗

第4話 記念すべき初依頼（前書き）

なんか長くなってしまった……

では、どうぞ

「「こいつ……寝てる（だと）！？」」

そう、カノンは、ドゴームのモーニングコールとユウキの断末魔を全くの無防備状態で食らったにも関わらず、まだ幸せそうな顔で眠っていたのだ。さらに不幸なことに、カノンの下にあるものはいつと。

「どうしてこうなるかな……」

お察しの通り、困り果てた顔のユウキであった。

「俺は長いことギルドでこの役をやっているが、……俺並みの音量で断末魔を上げる弟子も、それをまともに食らっても起きない弟子も、初めて見たぞ」

ドゴームが呆れたように嘆息した。

「うーん……電撃ってどう出すのかわかんねーし、そもそもこいつ効くかわかんしな……でもやっぱりこういう時はやっぱり、」

ユウキはぼそりと呟いて、

「これだな」

カノンの足の裏と耳の裏を高速でくすぐり始めた。

「……ひっ、ひうつ、ふひゃ……ひやはひゃひゃあああ！……ひ
あああああああ！……」

すると、予想以上に効果はあつたらしくカノンは変な悲鳴を上げ、
ばたばたと身体をよじって暴れ始めた。ユウキがくすぐるのを止め
ると、

「ふいつ…ふひゃああ…。あ、ユウキ…おはよー」

「おはよー、じゃねえ……っておいドゴーム！ ペラップが朝は早
いとか言ってたが大丈夫なのか!？」

「うおおっ！ 大丈夫じゃねえ！ やべえ、親方様のアレを食らう
羽目になるぞ！ 急げ！」

まだ寝惚けているカノンを遠慮無く引きずり、ユウキは全力でド
ゴームを追いかけた。

「遅いぞ！ 新入り！ ドゴーム！」

やっぱりペラップに怒られてしまった。毎朝辛いなあ、とユウキ
は肩を落とす。

「さて、全員集まったようだな。よろしい ではこれから朝礼を
行う。親方様、全員揃いました」

ペラップがプクリンの部屋に声をかけると、しばらくしてプクリ
ンが出てきた。だが、なぜかユウキはその姿に違和感を覚えた。

「では親方様 一言お願いします」

ちなみに、まだふらついているカノンはユウキに寄りかかって居眠りをしている。

皆の注目がプクリンに集まる。が、なぜかプクリンは何も言わない。

(……まさか、コイツ)

「……………ぐうぐう……………」
ぐうぐう……………ぐーう……………ぐうぐう……………」

(やっぱりかーっ！ やっぱり寝てたかーっ！ さっきの違和感の正体はこれかーっ！ ていうか何なんだこの人ーっ！^{ポケモン})

ユウキは内心叫びまくっていた。が、顔には出さないのでおく大人なユウキである。

ふと見ると、弟子たちが何か小声で喋っている。耳をそばだてると、こんな会話が聞こえてきた。

「(……プクリン親方って相変わらず凄いよな……………」

「(ああ……………ああやって起きてるように見えて、実は目を開けたまま寝てるんだもん……………」

「(……まあ、俺は今朝、それに匹敵する凄さを持った奴を見たがな……………」

最後の台詞は敢えて無視するユウキだった。

「ありがたいお言葉、ありがとうございましたあ」

ペラップが、さもプクリンが何か言ったように無理矢理終わらせる。

「さあ皆 親方様の忠告を肝に銘じるんだよ 最後に 朝の誓いの言葉、はじめっ」

「ひとつ！ 仕事は絶対サボらない！」

ユウキが戸惑っていると、カノンがようやく目を覚ました。寝ぼけ眼で辺りをきよるきよる見回し、ようやく自分がおかれている状況を理解して、

「……むぐっ」

危うく叫びかけたのを、ユウキに口を塞がれ回避した。

「みつっ！ 皆笑顔で明るいギルド！」

「さあ皆 仕事にかかるよっ」

「おおーーーーーっ！！！」

ユウキが寝ぼけカノンと必死の攻防(?)を繰り返しているうちに朝礼は終わり、弟子たちは各々散っていく。何とかカノンを完全に起こすことに成功し、ユウキが胸を撫で下ろしていると、ペラップが近寄ってきた。

「おい、そんな所でぼーっと突っ立っているんじゃない。オマエた

ちはこっちだ　ついてきなさい」

ペラップを追って地下一階へ上がると、来たときはよく見なかったが、大きな掲示板が二つあった。ユウキたちは左側の掲示板へ案内される。

「オマエたちは初心者だからな　まずはこっちの仕事をやってもらおう。これは掲示板。各地のポケモンたちの色々な依頼がここに集まってるんだ。依頼の種類も色々あるぞ」

掲示板には沢山の紙が乱雑に画鋏で止められており、一枚ずつに依頼が書かれているようだ。

「こんなに沢山依頼が来るのか……」

「最近、悪いポケモンが増えているのは知ってるか？」

「悪い……ポケモン？」

ユウキが訊くと、カノンは頷いて言った。

「そうそう。ボクも聞いた話なんだけど、何でも時が狂い始めた影響で、悪いポケモンも増えてるんでしょ？」

「時って…時間のことか？　それが狂って……悪いポケモンが増える？　どういふことなんだ？」

「それに関してはワタシも分からないがな。とにかく、そのせいで掲示板の依頼が増えているんだよ。あと、これは時の影響なのか分からないんだが、最近各地に広がってきているのが……不思議のダ

ンジョンだ」

「不思議のダンジョンって、入るたびに地形や落ちている道具が変わるダンジョンのことでしょ？ 途中で力尽きちゃうとダンジョンの外に戻されて、持ってたお金が無くなるし、道具も半分ぐらい無くなることもあるっていう… 本当に不思議な場所なだけだね。でも行くとびに新しい発見があるから、探検にはもってこいの場所なんだよ！」

カノンは目を輝かせながら力説する。正直、ユウキには半分理解できたかできないかぐらいだった。

「なんだ よく知ってるじゃないか それなら話は早い。依頼の場所は全て不思議のダンジョンだからな。それじゃあ… どうしようかな」

ペラップは掲示板に貼られた紙をぺらぺらとめくり、その中から一枚を抜き取った。

「これがいいだろう。ホレ」

カノンはその紙をペラップから受け取ると、音読し始めた。

「えーと……」

はじめまして。

私、バネブーと申します。

ある日、私の頭の真珠が悪者に盗まれてしまったのです。

その後の情報によると、“湿った岩場”というダンジョンの奥に捨てられていたらしいのですが…

その岩場は危険な所らしく、私一人ではそんな所怖くて行けません！

ですので探検隊の皆様、私の真珠を取ってきてくれないでしようか？

お願いします！！

……だそうだよ」

「ふむ。……そんじゃ行くか、その“湿った岩場”つつう所に」

「うん！ 初めての依頼だもん、頑張ろうねっ！！」

「……意気込みは素晴らしいのだが、まず跳ねるのを止める。落ち着け。はい、深呼吸」

「すうー、はぁー、すうー、はぁー……」

「落ち着いたか？」

「うん！ 落ち着いたよっ」

「全く落ち着いてねえぞコイツ……」

ユウキの頭の中に、また一つ重大な懸案事項が増えた。

第5話 グレアース参上!?(前書き)

今回かなり急いでたのでグダグダですorz

ユウキ「いつものことだろ」

うっわ、酷……

ユウキ「それでは本文どうぞ」

第5話 グレアーズ参上！？

「ユウキー、早く行こうよー！」

カノンが無邪気に言っで、走り出した。ユウキも慌てて追いかける。

どんつ。

ユウキの前方から、何かが衝突したような音が聞こえた。前を見ると、アーボック、ノクタス、クチートの三匹がカノンを取り囲んでいるのが見えた。リーダー格らしきアーボックが何か喚いている。

「てめえ何様だ？ 俺様にぶつかっておいて、すみませんの一言もねえのか？」

「ひっ……」

カノンは怯えてしまったのか、何も言えないようだ。ユウキはゆっくりと近寄っていき、カノンに詰め寄ることに夢中になっている三匹に声をかける。

「ようチンピラども。てめえらつてさ、女の子相手に1：3までしないと勝てねえのか？ 随分と弱っちいチンピラだな」

案の定挑発は効果抜群だったらしく、三匹は一斉にユウキの方を向いた。

「ああん？ そっちこそ言ってくれんじゃねえか。なんならここで

戦ってもいいんだぜ？」

アーボックはユウキを格下と踏んだのか、余裕たっぷりの表情で攻撃態勢をとる。その通り、戦い方すら知らないし、攻撃を食らえばすぐに倒れてしまう格下なのだが。

「いや、俺らはちゃんとこなすべき依頼があるからな。暇人じゃねえんだよ」

「貴様、それだけ言っというて逃げる気か？」

「まあ、そう取ってくれやがってもいいさ。ただし一つっておくぜ」

「……何だ？」

「俺を舐めんなよ？ そんじゃあな。依頼人が待ってっからよ。カノン、行くぞ」

「……う、うん」

ユウキはやや呆然とした表情のアーボックの答えを待たず、カノンを連れて走り出した。

「ふえええ……。怖かったよう、ユウキ」

三匹が見えなくなってから、カノンはいきなりユウキに抱きついた。ユウキはバランスを崩しかけ、よろめく。

「うわっ……驚かせるなよ、全く」

「ありがとお……ユウキがいなかったら、ボク今頃あの^{ポケモン}人たちに殺されてたよお」

「あーあー。そのヘタレ具合、何とかしろよ。……そして、カノン。非つつつつ常に言にくいのだが」

「何？」

「思いつきり喧嘩売っちゃったはいいものの、あいつらゴールドラックだったわ……すまん」

それからは特にトラブルも無く、二匹は湿った岩場の入り口に到着した。その名の通り、空気がじめじめしていて、大きな岩がごろごろ転がっている。正面に見える二つの岩が重なる所にぽっかりと裂け目が空いており、探検隊の誰かが作ったのか、近くの木製の看板に“湿った岩場”と書かれていた。

「お、着いた着いた」

「よーし行くぞう！」

叫んで、カノンが岩の裂け目に飛び込む。……が、お約束なのか、カノンは周りの岩に侵入を拒まれて勢いよく吹っ飛んだ。

「いったあ……」

「いったあじゃねーよ、不死身かお前は」

「フフフフフ……バレてしまったのなら仕方あるまい。何を隠そう、ボクは不死身なのだ」

「……これでもか」

すかさずユウキは転がっているカノンの足の裏をくすぐる。

「みつ……みきやあああああああ……！！！！　すび、すみましえん、嘘つき、まひたああああ！！！！！！！！」

「ほら、漫才やってないで行くぞ」

「いやー！　ボクを置いてかないでー！」

もはや恒例の如く、ユウキはカノンをずるずると引きずって岩の裂け目に侵入するのであった。

「“体当たり”！」

カノンはいつものヘタレ具合とは裏腹に、案外強いことが判明した。今も、野生のカラナクシを体当たり一撃で倒していた。

「意外と強いんだな、お前」

「うーん、探検隊になりたかったからいつも訓練とかしてたんだよ

ねー」

「成程。ちよつと見直し」

「最初は怖くて木に“体当たり”すら出来なかったんだけどね」

「言わなきゃバレないことわざわざ言うな！ 見直しかけたけど今ので何も言えなくなったから！」

相変わらずどこか抜けているらしいカノンに突っ込みを入れつつ、ユウキも負けじと襲いかかってくる野生のポケモンたちをさっき習得したばかりの電気ショックで倒していく。

「順調だな」

「うん。このまま行っちゃおう！」

「……いい加減、その異常なテンションはどうにかならないのか？」

「大分奥まで来たね……」

「ああ、そうだな……バネブーの真珠、あるか？」

「うーん……あつ！ あれじゃない？ ちよつと待ってて」

カノンは苔の生えた岩の陰から何かを見つけ出し、またユウキの所へ戻ってきた。わずかに息を弾ませたカノンは、ピンク色に淡く輝く、綺麗な球の形をした石を持っていた。

「成程、多分これだな」

「やったあ！　ユウキ、初依頼は大成功だよ」

「そうだな！　そんじゃあ、帰るとするか」

ユウキとカノンはハイタッチを交わすと、バッジのテレポート機能でギルドへ帰っていった。実はバッジを忘れたカノンが、真珠を持っているためと称してユウキにバッジを使わせたのはまた別の話

「ありがとうございます、カノープスさん！　もう私、これが無いと落ち着けなくて……ずーっと家の中を跳ね回っていたんです！　もう、何と言ってお礼をしたらいいか……」

目を潤ませながらそう言うバネブーの身体には、沢山の絆創膏や湿布が貼られていた。

「あ、あと、これはお礼の品々です！　どうぞ受け取ってください！」

バネブーはユウキに、グミやタウリンなど、さまざまな道具を手渡した。

「え！？　いいのこんなに！？」

カノンが驚いてバネブーを見た。だが彼は、カノンにもう一つ袋を渡す。中身を見たカノンは、危うく卒倒しかけた。

「に、2000ポケ!? 嘘!？」

「なんのなんの。真珠に比べれば安いものですよ。本当にありがとうございました。」

「バネブーが去っていくと、カノンはいきなり興奮して飛び跳ねながら言った。」

「ねえ凄いよユウキ! 2000ポケだつて! ボクたちいきなり大金持ちだよ!？」

「ユウキが若干気圧されつつも「あ、ああ…」とか答えていると、ペラップがやってきた。」

「オマエたち、よくやったな だが、お金は預かっておくよ」

「「え!？」」

「ほとんどは親方様の取り分だよ えーと…オマエたちはこれくらいかな」

「ペラップが袋から出して、カノンに渡した金額は。」

「に、2000ポケ……」

「一気に減らされたな、おい……」

「これがギルドのしきたりなんだよ。我慢しな」

「うー……」

カノンが耳とシッポを力無く垂らす。その時、食堂からチリーンの声が聞こえてきた。

「みなさーん　食事の準備が出来ましたよー」

するとカノンはいきなり耳とシッポを立てて、「ごはん　ごはん」　と謎の歌を歌いながら食堂に走っていった。一人取り残されたユウキは、溜息混じりに呟く。

「単純な奴だ……」

晩御飯の後、ユウキとカノンはギルドの弟子の一人、キマワリに呼び止められた。

「きゃー！　新入りの子はかわいいですわー！　きゃー！」

一人でテンションが高くなっているキマワリに、ユウキは少し気になっていることを訊いた。

「あー、すみません。この辺に、アーボックとノクタスとクチーのチームってありますか？」

ユウキの質問に、カノンはわずかに身体を強張らせた。キマワリは一旦思案顔になったが、やがて思い出したように言う。

「敬語はいらないですわよ。えーとそれで、アーボックとノクタス

とクチート…？ あ、ああ。確かに、グレアーズっていう探検隊がいたはずですね。でも、それがどうかしましたの？」

「いや、別に…ちょっとした噂を聞いただけで…いや、聞いたただだ」

「それならいいですね。じゃあ、お休みですわー！」

「お休み、キマワリ！」

カノンが元気に返すと、キマワリは自分の弟子部屋へ入っていった。二匹も自分たちの弟子部屋へ入り、藁のベッドに潜り込む。

「ユウキー、まだ起きてる？」

「何だ？」

「初めての依頼が上手くいったよ。まあ、ポケをプクリンにほとんど持ってたかちやっただけだよ。でもこれでも修行なんだもんね…ふあああ」

「今日は本当忙しかったもんね。カノンもう眠いだろ」

「うん…ふああ」

「じゃあ早く寝るとしようぜ。明日は俺の上に乗って気持ちよさげに寝てんじゃねーぞ……」

「はい……お休みー」

「じゃ
…」

そんなやり取りを交わし、二匹は眠りについた。

第5話 グレアーズ参上！？（後書き）

カノン「グレアーズという名称はどこから？」

響き。

ユウキ「適當すぎだ。という訳で電気ショックの刑」

ぎゃーっ（断末魔

第6話
ルリリの叫び（前書き）

みきやああああああああああ！！！！！！！！！！

テスト終わったああああああああああああああ！！！！

! ! ! ! ! ! ! !

カノン「念のため。今回のサブタイトルは、ルリリの叫びであって凜月の叫びではありません」

ユウキ「そしてテスト終わったの29日だったはずなのにかなり経ってないか？」

うぐっばれたか。だって今回の長かったし

ユウキ「まあいい。この間に読者さんがいなくなつてないことを願つておけ」

大丈夫それに関してはテスト期間中もずっと祈ってた（笑）

カノン「……。とりあえず、本編行こうか」

ユウキ「だな。では、どうぞ」

「みつっー！ みんな笑顔で明るいギルド！！」

「さあ皆 仕事にかかるよっ」

「おおおーっ！！！」

背中を強打したせいではっちりくつきりすつきり目が覚めたのか、カノンはしっかりした足取りでペラップの元へ向かっていく。

「ペラップー、今日の仕事はー？」

「おお 朝から気合が入っていてよろしい。ついてきなさい」

ペラップは梯子を登っていき、今度は前の依頼とは別の掲示板の前で止まった。

「あれ？ 昨日はあっちの掲示板じゃなかったっけ？」

「そうだ。あっちのとは少しばかり違うんだよ」

ペラップは昨日依頼を受けた掲示板をカラフルな翼で示した。

「あっちの掲示板には、ダンジョンの中で倒れたポケモンポケモンの救助だとか、ダンジョン内での一般人の護衛だとか、そういう依頼が来るんだよ。で、こっちの掲示板はだな……」

ペラップは一瞬にやりと笑ったような顔になり、言葉を切った。そして、カノンの耳元で囁く。

「……お尋ね者だ」

「ひっ……」

カノンの顔からさあつと血の気が引いていく。

「だからこいつらには賞金が懸けられてるんだがな……凶悪なポケモンが多いんだよ」

「ええっ……！？無理だよ、そんなのボクたちに捕まえろって！？」

「……ハハハハッ 冗談だよ、冗談 世紀の極悪人ポケモンもいれば、ちよつとしたコソドロもいるって感じで本当にピンキリだよ まあ、この中から弱そうな奴を選んで捕まえてきてくれ」

「ユウキ……ペラップがボクのこといじめてくるー……」

「お前はちっちゃい子か。……で、ペラップ。弱そうな奴とはいえ、準備しなくていいのか？ 相手は死に物狂いだから、さすがに無防備じゃまずいだろ」

「それもそうだな。誰かに施設を案内させるか。……おい！ ビッパ！ ビッパ！？」

しばらくすると、息を切らせたビッパが走ってきた。

「はあはあはあ……。呼びでしょうか」

「コイツらのことはもう知ってるよな 最近入った新人りだ。コ

イツらにトレジャータウンを案内してやってくれ」

「はいっ!! 了解でゲス!」

「オマエらビツパの言うことをよく聞いて行動するんだぞ。じゃあな」

ペラップは上機嫌そうに去っていく。

ユウキがさて案内してもらうかとビツパの方を見ると、ビツパはなぜかプルプルと小刻みに震えながら目に涙を浮かべていた。

「ど……どうしたの?」

カノンが問いかける。

「うつつ……後輩が出来たんで感動してるでゲス……。キミたちが来る前は自分が一番の新入りだったでゲスよ……ぐすんっ……って、こうしちゃいられないでゲスね。案内するでゲス。ついてくるでゲスよ」

トレジャータウンに向かう途中、ユウキはビツパに一つ気になっていることを訊いた。

「おいビツパ、そういえばあのグレッグルって、何やってんだ?」

「実は何をやってるのか、あっしにも分からないんでゲス。ただいつも後ろの壺をいじってるみたいなんでゲスが……」

そういえばグレッグルは、確かにさつきも自分の後ろにある怪しげな壺に半分頭を突っ込むようにして何かをしていた。

「なんか怪しい人だよね……」
ボケモン

カノンが呟いた。

「さあ着いたでゲス。ここがトレジャータウンでゲスよ」

「ああ、トレジャータウンのことならボクも分かるよ。えーっとね、あれがヨマワル銀行。で、あっちがエレキブル連結店……だけど、今日はエレキブルさんいないみたいだね」

カノンが前足で次々と店を示しながら説明していく。

「あそこはカクレオン商店。その隣がガルーラの倉庫だよね」

「随分詳しいでゲスね。それなら安心してゲス」

ビッパが感心したように呟く。

「じゃああつしは先にギルドに戻ってるでゲス。準備が終わったら地下一階に来るでゲスよ。そしたらあつしもお尋ね者を選ぶの手伝いでゲス」

「ありがとう！ ビッパって優しいね」

「そ、そんなぁ……」

ビッパは赤面して少しうろたえるが、気を取り直してギルドへと戻っていった。

そしてユウキとカノンはガルーラの倉庫で余分な道具を預けたり、トレジャータウンにいる先輩探検隊と喋ったりした後、カクレオン商店に寄った。

店主のカクレオン兄弟は話好きなのか、カノンと世間話に花を咲かせている。

少し手持ち無沙汰気味になってしまったユウキがふと横を見ると、二匹のポケモンが走ってくる場所だった。

「カクレオンさ〜ん！」

「ん？ おお〜！ マリルちゃんとルリリちゃん！ いらっしゃい〜」

「えっと、リングوください！」

カクレオンは慣れた手つきでリングを袋に詰め、二匹に手渡した。マリルが代金をカクレオンに渡し、去っていく。

「あの二匹は兄妹で、お母さんの具合が悪いのであやっつていつもお使いに来てるんですよ。ホントに偉いですよね〜」

「へえ……まだちっちゃいのに偉いね〜」

カノンが感嘆の声を上げた。内心ユウキはお前がちっちゃいとか言えるのかと突っ込んでいたが、しっかり喉元でストップである。

「カクレオンさ〜ん!!」

「あれ？」

その声に四匹が振り向くと、マリルたちがまた戻ってきていた。

「どうしたの？」

「リンゴが一つ多いです！」

「ああ、それはワタシからのおまけだよ。仲良く分けて食べるんだよ」

「ホントですか!？」

「わーい！　ありがとうカクレオンさん！」

ルリリが跳ねて喜んだ。

「いやいや。気をつけて帰るんだよ」

「はい！　さ、ルリリ。帰ろう」

「うん！」

走り出すマリルたち。が、ルリリが転んでしまい、袋からいくつかリンゴが転がり出す。

「大丈夫か？」

ユウキが足元に転がってきた一つを拾い上げてルリリに手渡すと、ルリリはぺこりとお辞儀をしてそれを受け取った。

「ありがとうございます」

そして他のリンゴを拾い集めて袋に入れ、もう一度お辞儀をして去っていった、その時。

(うつ……?)

突然ユウキは、得体の知れない立ちくらみに襲われた。あまりの不快感に倒れそうになるが、なんとか踏みとどまる。

そして、次の瞬間。

目の前を閃光が走り抜け、声が聞こえた。それも、助けを求める声。だがそれも一瞬後には消え去り、カノンとカクレオンたちは何事も無かったかのように談笑している。

「おい…カノン、今何か聞こえなかったか？」

「どしたのユウキ？　ボクは何も聞こえてないけど……カクレオンは？」

「いや、ワタシは何も」

「ワタシもですね」

だが、確かに聞こえたのだ。助けを求める声、しかも聞いたこと

のある声だ。しかしそんなユウキの様子にも気づかず、カノンは笑って言う。

「ユウキだいじょぶ？ 寝不足は身体によくないよ？ 今日からちゃんと寝な？」

「いやカノン。もしも俺が寝不足なら、それは間違いなく九割方お前のせいだと言っていい。断言する」

「乙女捕まえて言う台詞じゃないよそれ！」

「じゃあ質問だ。ドゴームのモーニングコール食らって起きなかったのはどこの誰だったかな？ 俺なんてあれでドゴームと同レベルの断末魔上げたんだからな」

「うぐ。ちゃんと今日から起きてるよ。……多少は」

「なんだその多少はって」

「い、いやあの……その、何か聞こえたというのは？」

既に脱線し始めたカノープス列車を、カクレオンが慌てて正規ルート の線路に押し戻す。

「ああ……それなんだが、さっき助けを求める声が聞こえた気がしてな……」

「助けを求める声？ だからそんなの聞こえないって。ユウキは嘔吐くの下手だねー。さ、そろそろ行かなきゃ。ビッパが待ってるよ」

ユウキは至って真剣なのだが、カノンはそれをあっさりと笑い飛ばす。そして、ユウキの手を引っ張ってずん前へ進んでいった。

川によって分けられた二つのトレジャータウンを繋ぐ橋を渡ったところで、カノンがいきなり立ち止まって声を上げた。

そこにいたのは、さっきの幼い兄妹たちと、黄色いバクのようなポケモンのスリープだった。

「あれ？ マリルちゃんとルリリちゃん。どうしたの？」

「あ、カノンさん！ ボクたち、前に無くした物があって……。それで、そのことをたまたまスリープさんに言ったら、場所を知ってるかもしれないから一緒に探してあげる、って言うてくれたんです！」

「そうなんだ。見つかるといいね！」

だが、ユウキはなぜかこのポケモンに違和感というか、心の中の妙な引っかかりのようなものを感じていた。分かりそうで分からない、届きそうで届かない位置にそれがあるせいで、そのうちにその引っかかりは心の端から転げ落ちてしまい、闇に埋もれてしまう。

「じゃあ、カノンさんたちも頑張ってくださいね。さよなら！」

すれ違いざまに声をかけられ、ユウキはほとんど反射的に「あ、ああ」と言いながら手を振り返した。

ぱしっ。

「おっと、失礼」

ぼうつとしていたせいでその手が後から行ったスリーブに当たってしまったようだった。謝ろうかとも思ったが、既に自分の視界にいなかったなので断念することにした。

と、その時。

再びあの不快感がユウキを襲った。ほぼ反射的に閉じた瞼の裏に再び閃光が走り抜ける。だが前回とは違って、今回はかなりくつきりした映像がユウキの脳裏に映し出されていた。

青色の小さなポケモン。それと向かい合う後ろ向きの黄色いポケモン。そして、青いポケモンの叫び声。

おいカノン、と言おうとして、一歩先に言われてしまった。

「ユウキどうしたの？ さっきからぼーっとしてて。普段より突っ込みもしくは辛辣な言葉のキレもよくないし……まあ、とりあえずギルドに帰る？」

結局言う機会を失ったユウキは、颯爽とギルドに向かうカノンにとりあえずついていくしかなかった。

第6話 ルリリの叫び（後書き）

カノン「ねえ凜月。前書きからの続きだけど、次は文化祭じゃないの？　そして、完結してない長編小説、しかもまだラストバトル書いてないやつ、×切明日だよな？」

う……。

ユウキ「そしてそれを催促する文芸部部長さんもこれを一応読んでくれてるんだよね？」

ううう……。

カノン「さっきそれ書いてたのにいつの間にかこっち来たしね」

ぐはあっ（死

ユウキ「あれ、死んだぞ」

だ、大丈夫！　ちゃんと書くから！

ユウキ「凜月の大丈夫程アテにならん物はねえよ」

カノン「せいぜい部長さんに怒られてなさい。じゃあ字数もアレなのでこの辺で」

ユウキ「さようなら」

カノン「さよならー」

あ、あとちなみに今後の展開(?)については活報に書きましたのでよろしくですorz

第7話 トゲトゲ山（前書き）

カノン「何日空けた？」

13日……（泣

ユウキ「しかもサブタイが明らかに手抜き」

ごめんなさいごめんなさい許してビリビリしないでえええ

あ、あと今回ギャグ要素がほとんど無いです

カノン「ではどうぞ」

第7話 トゲトゲ山

「ビツパ〜！ 終わっただよ！」

「お、それじゃあお尋ね者を選ぶでゲスよ」

若干腰が引けているカノンがビツパと共にお尋ね者を選んでいる中、ユウキはさっきの映像をぼんやりと思い出していた。黄色いポケモン……あれは誰なんだろうか。

「情報を更新します！ 危ないので下がってください！」

「わっ！」

突然掲示板の奥から響いてきた声に、カノンは吃驚して飛び退いた。と同時に、掲示板がばこんという音を立てて裏返しになる。カノンは本能的に立った耳とシッポをぴくぴくさせながら、ビツパに尋ねた。

「ねえビツパ、今の何？」

「あれは掲示板の情報の入れ替えでゲス。ダグトリオがいつもああやって、掲示板の情報を新しいものに書き換えてるんでゲスよ」

「ふうん……」

「更新終了！ 危ないので下がってください！」

威勢の良いダグトリオの声が再び響いた。その声で現実を引き戻

されたユウキは、次の瞬間とんでもないものを目にする事になる。

《お尋ね者 スリープ》

間違いない。あの黄色いポケモンだ。

「カノン！」

「ひゃいつ!?!」

ユウキの鋭い声に、カノンが飛び上がって間抜けな声を出した。

「とりあえず来い！ 説明は後でする！」

「えっ!?! ちょ、ユウキ!?!」

カノンの首根っこを掴むと、ユウキはギルドの壁に突っ込まんばかりの勢いで走っていく。後には、惚けた顔をしたビツパだけがぽつんと一人残された。

「え? どうしたんでゲス? ど、どこ行くでゲスかあゝ!?!」

「はあ、はあ……あれ? マリルどうしたの?」

「あつ! カノンさん、ユウキさんっ! る、ルリリが、ルリリがいなくなっちゃったんです!」

「スリープと一緒に、か?」

「そう！　そうなんです！　気づいたらいつの間にか……」

「どっちへ消えてったか分かるか？」

「はいっ！　こ、こっちです！」

「ルリリが誘拐されたあ！？」

「お前見なかったのか、さっき掲示板にあったんだよ。アイツはお尋ね者だ」

「お、お尋ね者！？」

「る、ルリリが……！」

走り出そうとしたマリルを、ユウキがやや強引に引き止める。

「危ないからお前はここで待ってる。ルリリは必ず俺たちが連れ戻してくるから」

マリルに案内されて着いたそこは、ユウキが見た映像とどこか似ていた。不思議な地図を広げて見てみると、「トゲトゲ山」と記されている。

「カノン。ルリリはこの山のどこかにいるはずだ」

「え……？　何で分かるの？」

「細かいことは後だ。とりあえず今はルリリの身が危ない」

「う、うん……分かった」

山の中は、ゴツゴツした岩が沢山転がっていた。走ったりするとすぐに転びそうになるので、注意深く進んでいく。また山だからか、全体的に虫タイプ、毒タイプ、飛行タイプ、岩タイプなどのポケモンが多い。

「体当たり」！

「電気ショック」！

最初こそ順調に襲いかかるポケモンたちを倒していくものの、やはり疲れが溜まってくる。注意力も落ちてきたので、ユウキがそろそろ休憩を取ろうかと考えていた時だった。

「痛っ！」

カノンが足元の石に躓いて転んでしまった。

「おい、大丈夫か？」

「いたたた……まあ大丈夫だよ。ありがと」

「やっぱり休憩した方が……え？ カノン、足元！」

「えっ!？」

訳も分からぬままカノンは跳躍し、半分ユウキに飛びつく形でその場から離れた、次の瞬間。

ズボッ！ という音と共に、カノンが躪いた石が地面から抜けた。

「い、イシツブテ……」

間一髪で助かったカノンが呆然としていると、上から声が降ってきた。

「……とりあえず、離れる。お前は何回俺の上に乗れば気が済むんだ」

自分を何とか抱きとめたユウキの声だと分かって、ぼんやりしたままユウキから離れる。

どん。

「……ふえ？」

後ろを振り返ると、そこには安眠を妨害されて怒ったイトマルがいた。

「逃げ……るのはきついな……。カノン、戻ってこい」

「……。はうっ」

あまりの非常事態に抜けかけたカノンの魂を戻し、ユウキはイシ

ツブテとイトマルに向き直る。

「電気ショック」!

ユウキはまず先に襲いかかってきたイシツブテに電気ショックを放った。が、確かに技は当たったはずなのに、イシツブテはあまりダメージを受けていないようで、構わずユウキに向かって突進してくる。

「な……」

「体当たり”…っ!”

だが、為す術の無かったユウキとイシツブテの間に割って入った影があった。

「カノン……!!」

「ユウキ、地面タイプの相手に電気タイプの技はほとんど効かないんだよ。イシツブテはボクが倒すから、ユウキはイトマルをお願い」

そう言うつと、カノンはイシツブテに向き直って突進した。だが、イシツブテはひたすらに逃げ回るだけで、何も仕掛けて来なかった。だが力を溜めながらそれを追いかけるカノンは、イシツブテよりも早く疲弊していく。

（このままじゃ疲れるだけ……だけど……あっ!）

何かを思いついたカノンは、トレジャーバッグから取り出した“それ”を自らの口に放り込んだ。

「“電光石火”！」

次の瞬間、イシツブテが目を回して倒れていた。

先ほどカノンが食べたのは、食べたポケモンの素早さを飛躍的に上げる種“俊足の種”だ。その素早さのままイシツブテに追いついて“体当たり”することで、威力は劣るが目にも止まらぬ速さで相手にダメージを与えることが出来る。さらに、イーブイの特性“適応力”。自分と技のタイプが一致していれば威力が通常よりも高くなるという効果を持ち、威力の低い“電光石火”でも致命傷を与えることが出来たのだ。

一方、ユウキはそこまで苦戦を強いられてはいなかったが、ここに来るまでに電撃を使いすぎたせいか、技の威力が落ちていた。そして実はユウキは物理攻撃が得意ではないため、今まで電撃に頼りすぎている所があり、ろくに攻撃も出来ない状態に陥ってしまったている。

「“電気ショック”」

その時、一発の電撃がイトマルに直撃した。だが威力が弱く、致命傷には至らない。ユウキは身構えるが、何故かいつまでも次の攻撃が来なかった。

「あ……？」

よく見ると、イトマルの周りには弱い電気が弾けていた。イトマルはそれを振り払おうとするように身体を震わせるが、思うように

身体が動かないようだ。

「麻痺……してるのか？」

今ならば、イトマルは思うように動けない。つまり、物理攻撃が苦手なユウキでも、ダメージを受けずに物理攻撃をすることが可能となる。

「よしっ……“体当たり”っ！」

為す術も無く、イトマルは目を回して倒れた。

「大丈夫だった？」

「ああ……何とかな。とりあえず疲れたし、一旦休憩しよう」

「うん……ボクも疲れた」

二匹はポケモンでないことを確認してから大きな岩の上に座り、トレジャーバッグからオレンの実とリングゴを取り出して齧る。

「もうちょつと俺も特訓しなきゃな……いつまでも電撃ばかりに頼っちゃいけないし」

「そだね。今度特訓しようか」

「だな……」

しばらく休んだ後、二匹は再び頂上へ向けて歩き出した。

第7話 トゲトゲ山（後書き）

カノン「……なんてggdggdな」

誠にすいませんでした。戦闘描写とか書くと本当に自分の文章力の無さを思い知らされるなあ……

ユウキ「駄目人間？」

がふうっ……ゆ、ユウキさん……それは禁句……

カノン「やれやれ。こりゃ駄目だ。ちゃんと研究するべし」

精進します！　そしてスリープ戦は次話で

あと文化祭終わりました。打ち上げも代休返上してディズニールンド行ってきました

ユウキ「じゃあこれから更新早くなるんだな？　なるんだよね？」

の……ノーコメントでっ！（汗

ユウキ「はあああ……」

第8話 スリープ戦

「ふう……ユウキ、ここって頂上かな……？」

「らしいな……あつ！　おい、あれ！　ルリリとスリープじゃねえか！？」

「本当だ……」

二匹はとりあえず岩陰に身を隠し、様子を窺う。

「言うことを聞けば返してやるって言ってるだろうが！」

「嫌……あ……お兄ちゃんっ……！」

ルリリは叫んで逃げ出そうとするが、スリープに遮られてしまう。そしてスリープの怒りが沸点を超えたのか、スリープは拳を振り上げてルリリに迫った。

「言うことを聞かないと……痛い目に合わせるぞっ！！」

「た……助けてっ！！」

間違い無い。あの時間こえた声だ。

「ユウキ、」

「分かってるさ」

微かに頷き、ユウキとカノンは同時に岩陰から飛び出した。

「待て！ お尋ね者のスリープ！」

「うつ！？ 何故ここが！？」

「ボクたちは探検隊“カノープス”！ お前を逮捕しにきたんだ！」

「なっ……！？」

緊迫した雰囲気の流れる中、ふとスリープが何かに気づいた。

「あれ……お前、もしかして……震えてるのか？」

「うつっ……」

「……カノン？」

ルリリを含め、三人の視線がカノンに集まった。

「はっ。お前ら、探検隊とはいえまだ新米か。俺様もそんな新米なんかに捕まる訳にはいかないなあ……っ！」

「てめえっ……！」

ユウキがスリープに向かって一直線に駆け出した。だが、カノンは動かない。緊張と不安で硬直してしまって動けないのだ。

「“電気ショック”！」

ユウキがスリープ目がけて電撃を放つ。しかしスリープは、それをいとも容易く躲してしまった。

「なっ？」

「はんっ」

スリープは驚きを隠せないユウキを鼻で笑うと、懇切丁寧に説明した。

「俺の特性は“予知夢”。お前の攻撃なんてどこから来るか分かるんだよ」

ユウキは舌打ちすると、今度は走りながら電撃を繰り返す。だがそれも、スリープは少し首を傾げるだけで躲してしまった。

さらに、そのユウキの背後からスリープが襲いかかる。ユウキは首をひねってスリープの姿を認識したが、回避できない。相当のダメージをユウキが覚悟した、その時

ユウキがスリープに躊躇なく突っ込んでいったにも関わらず、カノンはまだ動けずにいた。このスリープはそこらの野生の敵とは違う。本能でそう感じ取っていた。

その証拠が、ユウキの放つ電撃はスリープに一度も命中していない。

だが

走っていたユウキに、スリープが背後から襲いかかるうとしている。ユウキは気づいていない。

そう思った瞬間に、身体が勝手に動いていた。

さっき掴んだ感覚。加速して、スリープの速度に追いつく。

「……“電光石火”！」

「ぐあっ！」

カノンに吹っ飛ばされたスリープが、呻き声を上げた。

「カノン……！」

「ごめんね、ユウキ。ボク……」

「最後まで言うなよ」

ユウキはちよつと怒ったような顔で言った。

「貴様らあっ……！」

起き上がったスリープが叫びながら突っ込んでくる。

「今度こそ行くぞ、カノン」

「うんっ！」

「電気ショック」！

戦っている内に、ユウキはすることに気づいていた。

スリープの予知夢が発動する直前、一瞬だけスリープの動きが止まるのだ。

つまり、その直後以外ならば攻撃が命中する、ということに。

さらにカノンが電光石火でちょこまかと動き回ること、予知夢がなかなか使えないのだ。

ユウキが勝てる、と確信に近いものを抱いた、その時。

突然ユウキが、見えない手に持ち上げられたように宙に引つ張り上げられた。そして、一瞬だけ放物線を描きながらユウキの身体が宙を舞う。そのまま落ちれば、その先は、崖。

「体当たり」っ！

スリープの仕業だ、と気づいたカノンがスリープに体当たりすると、ユウキの軌道が一気に変わった。だが崖に落ちるのは免れたものの、岩に思いっきり叩きつけられたため、ダメージはやはり大きい。

「電光石火」！

カノンは自分の前に立ちはだかるスリープを電光石火の瞬発力で躲し、ユウキの元へ駆けつけた。

「ユウキ!？」

「う……ぐっ……」

「駄目だね…… とりあえずこれ食べて!」

トレジャーバッグからオレンの実を数個取り出し、ユウキの横に素早く並べる。そしてスリープから弱ったユウキを守るように背を向け、身構えた。

「…………… “電光石火” っ!」

カノンはさつきと同じように電光石火で攪乱を始める。だが、実はカノンの体力もそろそろ限界に達しようとしていた。

電光石火のスピードで走り続けるには、それ相応の体力を要する。ほとんど止まっているスリープとは、消耗する速度が違いすぎる。おそらく、あと一発でもスリープの攻撃を受けてしまえば終わりだろう。そうでなくても、このまま走り続ければそう長くは持たない。

「…………… “体当たり” !」

得意の体当たりで短期決戦を挑むが、焦っているせいかなかなか命中しない。スリープの動きに注意する余裕も無く、少しずつ体力が削られていく。

（ルリリが……）

怯えて逃げることも出来ずに隅で震えているルリリの姿が、カノンの眼に一瞬映った。

う。
万が一の時はスリープと相討ち覚悟でルリリだけでも逃がそう。

「電磁波」！

そう思ったカノンの頭上を、青白い電撃の槍が通り抜けた。

「うっ！？」

そしてそれはカノンの動きだけを見ていたスリープに見事命中し、その動きを鈍らせる。

「カノン！ 今だっ……！」

ユウキの声だ。

「体当たり”っ”！」

今度こそ、渾身の体当たりがスリープに命中する。ユウキの電磁波で全身が麻痺してしまったスリープは為す術も無く、カノンに吹っ飛ばされて昏倒した。

「はあっ、はあ……た、倒した……のかな？」

「そうみたい、だな……」

「あつ！　そういえば……ユウキ、大丈夫なの？」

「ああ。ボロボロで電磁波しか出なかったがな」

イトマルと戦った時に偶然習得した“電磁波”。電気ショックよりも弱い電撃を浴びせることで、相手を麻痺させる技だ。

「良かったあ……あれ？　ねえユウキ、あれってジバコイル保安官とコイルたちじゃない？」

「どうやらそうらしいな……とりあえず、これを連れてってもらわなきゃだな」

ジバコイルの姿を認めた二匹は、目を回しているスリープを放置してルリリの元へ。

「大丈夫？　どこか痛い所無い？」

「はい。大丈夫です」

「そっか、良かった良かった。それじゃあ帰ろつ。お兄ちゃんが待つてるよ」

「はい！」

ルリリを連れてしばらく坂を下ると、麓の地点が見えてきた。

「そろそろかな……あつ！　ルリリ！　お兄ちゃんがいるよ！」

「ルリリ！！」

「お兄ちゃん……ん！！　怖かったよ……！！」

二匹が互いに走り寄った。

「大丈夫か？　怪我してないか？」

マリルはルリリを抱きしめると、心配そうに訊いた。カノンが笑顔で答える。

「大丈夫だよ。怪我してないよ」

「本当！？」

「うん！　どこも痛くないよ！」

「良かった……本当に良かったよ」

マリルはユウキとカノンに向き直ると、ぺこりと頭を下げた。

「カノンさん、ユウキさん、本当にありがとうございました。このご恩は忘れません。……ほらルリリも」

「あつ……助けてくれてありがとうございました！」

マリルたちと別れてギルドに帰ると、交差点でジバコイルたちが待っていた。スリープはコイルたちの磁力によって逃げられないようにされているらしい。

「コノ度ハ才陰様デ、オ尋ネ者ノスリープヲ逮捕スルコトガ出来マシタ！　ゴ協力感謝致シマス！」

「えへへ。ギリギリだったけどね」

「どーしていつもお前は言わなきゃ分からんことをことごとく言うかな……」

ユウキが嘆息した。

「賞金ハギルドニ送ッテオキマス。アリガトウゴザイマシタ！」

コイルたちが電子音を立てた。きっとそれが彼らの感謝表現なのだろう。

「スリープ。サア来ルンダ」

「トホホ……」

スリープが項垂れて、コイルに連行されて行った。ユウキとカノンはそれを見送る。

「ふう……とりあえず、お尋ね者、たいほー！！」

カノンが跳ねて叫んだ。その声は沈みかける夕陽に吸い込まれていく。

「逮捕……」

こんな時でもすぐにいつものハイテンションを取り戻すカノンに、ユウキはやっぱりついていけなかった。

第8話 スリープ戦（後書き）

ユウキ「……………」

カノン「……………」

出来が酷いと言いたいのね。

カノン「スランプとはいえ酷……………」

すいません。きっとこれが凜月の実力なんですよええどうせどうs
(ry

ユウキ「いじけるな」

うん（キラキラ 人生れつつポジティブシンキングだねっ！

………… 自分でやってて痛いな。

そして、早ければ次辺りから本編から逸脱し始める予定です。

それでは！ 更新頑張るので見捨てないでください！（ 必死）

第9話 密かに動き出す影（前書き）

うわあああああ……ああああー……ああー……。

カノン「……何があったの？」

なんか最近2週間に1回っていう超絶ノロノロ更新が普通になりつつある……。

ユウキ「……よく聞こえなかったなー。もう一度言ってくれ」

何でも無いよー……。

あ、そうだ。今回明らかに繋ぎの回なので短いです。

でも次ちょっとgagagagする予感。

まあ、とりあえず本編どうぞ……（ぱたっ

第9話 密かに動き出す影

スリープ逮捕から数ヶ月後のギルド、親方部屋にて。

「やったあああああ！！！」

カノンが勢いよく飛び跳ねて、床がぎしぎしと音を立てた。

（この建物……大丈夫か？）

ユウキは喜びながら建物の心配をするという何とも複雑な表情を浮かべると、プクリンに訊いた。

「ゴールドランク、へ昇進？」

「うん キミ達最近頑張ってるからね。さて、バッジ貸して」

脇に控えていたペラップが、二匹から半ばふんだくるようにしてバッジをプクリンの所へ持っていく。

「ありがとうペラップ。……えーっと、どうするんだっけ。まあいいや」

そう言うつと、プクリンは息を大きく吸い込んだ。

（来る！）

山火事を察知した野ネズミのような素早さで いや、実際ネズミなのだが 耳を力の限り塞ぐユウキ。それを見たカノンも、フ

ルスピードで耳を塞いで丸まった。

「たあああああああ————つ！！！！！！」

よそ見をしていて気付かなかったペラップが、不意打ちに耐えられずダウンした。

「はい！これがゴールドランクのバッジだよ」

「わあ……」

手渡されたバッジは、表についている球の色が変わっていた。ラ
ンクの名前の通り、金色に輝いている。

「これからも頑張つてね！……で、早速頼みがあるんだけど」

プクリンは後ろにあった箱から封筒を取り出し、ユウキに手渡した。表に足型文字が書かれている。

「それ、ツクサタウンまで届けて来てくれないかな？　不思議な地図出して」

プクリンが示したのは、トゲトゲ山の近くにある小さな村だった。

「村長さんに訊けば分かるはずだから。村長さんは村の中で一番大きい家に住んでるよ」

「分かった。カノン、良いよな。……カノン？」

返事が無いのでユウキが横を見ると、カノンは身を乗り出してユウキの持つ封筒を覗き込んでいた。そのままの姿勢で、封筒を凝視している。

「……カノン？」

「……あ、ああ……何でもない。うん、届けてくるよ」

「決まったみたいだね。じゃ、頼んだよ」

話を終えたプクリンが後ろの箱をいじり始めたので、ユウキとカノンは部屋を出た。既に外は薄暗くなっている。

「ところでカノン、何かあったのか？ 落ち込んでるっぽいけど」

「……ううん。落ち込んではいないよ。ただ、ちょっとね……」

カノンは窓の外をちらつと見ると、静かな声で言った。

「……長い、話になるかもしれない。けど、聞いて」

一方その頃、とある場所にて、二匹のポケモンが向かい合っていた。

「……はい、完了しました。あとは私にお任せ下さい」

「随分と余裕なのね……まあいいわ。それで上手くいくなら」

「ええ、大丈夫です。……ただ、>あれ<が……」

「それは仕方無いわ。祈るしか方法は無いのよ」

「……お言葉ですが、私は不確定要素を完全に取り除きたいのです。やはり>あれ<は始末し……」

「いい加減にしないで」

つかの間の静寂。

「>あれ<は私が始末しないって決めたの。一応あなたは私に従っている身でしょう？ これ以上言わせないで、ソルア」

「……分かりました、ルーシイ様」

ソルアと呼ばれたポケモンは恭しく一礼すると、その部屋を去った。そして、呟く。

「……ルーシイ様、申し訳ありません。>あれ<は……私たちにとって、存在してはならない者なのです」

誰も気付かない所で、事態はゆっくりと、だが確実に進行していた。

第9話 密かに動き出す影（後書き）

いや、明らかに手抜きとか言わないで。

最初の一文とかぶん殴るぞコラアとか言わないで。

でも最近思う。そもそも忘れられてる可能性大いにある気がする。

まあそれはおいといて。

最近TPP参加で二次創作が禁止になるとかいう話を聞いて凄く怖いです。

今書いてるのなんてこんなにgdgdでこんなに長続きの初めてなのに

いつだか青少年健全育成ナントカっていうのがありましたけどその時ぐらい怖いです。

まあ、中2のガキがこんなこと言っても仕方無いですけどね……。

では。

第10話 夕暮れの憂鬱（前書き）

あああああああ……

やってしまったあああああ……

ユウキ「どうした」

gggg……もう嫌……自己嫌悪……

ユウキ「相変わらずか。まあいい、放つとこう」

えー……

そして注意！ 今回なんかとってもアレです。暗いです。

それでは本b……

ユウキ「じゃあ放つとこう」

ビビビビビビ（いやそれ読み方変えないでえええええ

第10話 夕暮れの憂鬱

カノンに連れられて来たそこは、二匹が出会ったあの海岸だった。

「……カノン？」

「……一つ、頼みがある。ボクがどんなことを言っても、何も言わないで聞いて」

「ああ。分かった」

「じゃあ、ボクの長い話を始めるよ」

えっと、何から話そうかな。まあ、とりあえずはボクの故郷のことから。

アクアフォレストって言って、自然豊かでも綺麗な森なんだけどね。ポケモンもいっぱいいて、自然を壊さないように家を造ったりして幸せに住んでいた。

とある日、ボクはお母さんにツクサタウンにお使いに行くように頼まれた。

まあ、よくあることだったし、特に何も思わずに家を出た。

そしていつも通りお店で頼まれた物買って、ちょっと木陰で休んだ。アクアフォレストからツクサタウンまでは結構距離があっ

て、疲れてたんだよね。

しばらく経ってそろそろ帰ろうかなって思った時、町の皆がやけに騒がしいことに気づいた。おかしいなって思っ、さっきの店の店主さんに訊いたんだけど、何故か店主さんは何も教えてくれなかった。

仕方無いから帰ろうとしたら、すれ違いざまに聞いちゃったんだ。

アクアフォレストが、襲撃されたらしい　　って。

ボクはその瞬間、全速力で走り出した。店主さんが血相変えて追いかけて来てみたいだけ、その時のボクの目には映らなかった。

嘘でしょって笑い飛ばしたかったよ。でもさあ、それだと店主さんがボクに何も教えてくれなかったのも分かつちゃうんだよね。店主さんはボクがアクアフォレストに住んでるって知ってたし。

走って走って走って、やっと着いたそこは　　もう、ボクの住んでる森じゃなくなってた。炎が上がって、悲鳴とか怒鳴り声が飛び交ってた。ボクの家ももう、燃えて無くなってた。

近くを無我夢中で探したけど、お父さんもお母さんもお姉ちゃんも弟もどこにもいなかった。友達も誰もいなかった。ボクはもう、その場に崩れ落ちることしか出来なかったよ。

でもその時、どこかから話し声が聞こえてきた。知ってる人かもしれないと思っ、て飛び出そうとしたんだけど、その声は明らかに笑ってた。ボクはその瞬間身を翻して、近くにあった千年樹の陰に隠れた。

この森に住む皆が、森が燃えてるのに笑ってるはずが無いもん。
敵だ、ってすぐ分かったよ。

その声の主は、笑いながら千年樹の前を通り過ぎて行つた。足音が完全に聞こえなくなるまで、ボクはずっと小さくなって震えてた。怖かったよ……。

そしてボクは、一応誰もいないことを確認して一目散に駆け出した。もう近くまで火が回つて来てたのもあつたけど、あの連中の会話　今も、鮮明に覚えてる。

“千年樹の近くに住むイーブイの小娘を捕らえられなかった”
って。

一瞬何のことか分からなかったけど、千年樹の近くに住む一家と言えばボクらだった。お姉ちゃんはいーブイじゃなくてももうエーフイに進化してたから、ボクしかないよね。

またボクは走って走って走って、今いる場所がどこか分からないのに走った。出来る限り遠くに逃げなきゃいけない。それだけを考えて走り続けて、とうとう限界が来た。

ああ、ボクは死ぬんだろうな　そう思った。不思議と冷静だったよ。でもあの連中に殺されるのは嫌だなとか、そんなことを考えた。

奇跡的に目が覚めたボクの視界には、ピンク色のポケモンとカラ

フルな羽を持ったポケモンがいた。

二匹の話をまとめると、どうやらボクは倒れてるところを助けられたらしい。

そう、お察しの通りあのギルドのプクリン親方とペラップだよ。

二人に名前を聞かれて、咄嗟にリリアって名乗った。命の恩人だけど、まだ警戒を解くことが出来なくてね……。

しばらくお世話になった後、ペラップに言われて海岸に移り住んだ。ほら、あのサメハダーみたいな形した崖があるでしょ？ あの口の中が部屋みたいになってるんだよ。

プクリンに敵が来るかもしれないって言ったら、プクリンはアクアフォレストの襲撃事件を極秘裏に調査することと、情報が入ったら知らせに来てくれることを約束してくれた。

そして数日後、ボクは海岸で倒れているユウキを見つけた。

ユウキは元々ニンゲンだったとかよく分からない部分もあったけど、でも何故か敵には見えなかったし、それどころかボクを変えてくれる気がした。

だから、こう言った。

「ボクは、カノン」

終始歌うような口調で語るカノンの双眸からは、ぼろぼろと大粒の涙が溢れ出していた。

それがユウキには、辛いのに、悲しいのに、自分のためにわざと明るく振舞っているようにしか見えなかった。

ユウキは語り終えたカノンの頭に手を伸ばし、その手を置いた。出来るだけ真剣な眼差しで問いかける。

「カノン　お前は、何で探検隊になろうと思ったんだ？」

カノンは一瞬吃驚したようだったが、すぐに微笑んで言う。

「ボクの故郷……アクアフォレストを、取り戻せたらいいなって、思ったから」

「それなら　絶対に、その願い叶えようぜ」

「……うん！」

「ほら、そろそろ夕飯だから涙拭け。俺がいじめたとも思われたらたまったもんじゃない」

「……わざと拭かないで行こうかなあ……」

「お前……」

一番星を背に、二匹は笑いながらギルドへ走った。

第10話 夕暮れの憂鬱（後書き）

うわーもうなんか嫌だ

そして何気なく更新早かったのでそれで許してくd（殴蹴刺

さて、本編を完全に逸れたので凜月は暴走を開始……げふんげふん、ちゃんとやりますから殴らないで。

さて余談ですが、凜月の所属している文芸部がなろうでの活動を開始しました！

今はなんだかRPGっぽい感じのファンタジーを上げていく予定です。

向こうでは凜月は燐音という名前になっています。

興味と暇がある方は「文芸開花」でユーザ検索ボタンをばちつとな

（古い？）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3456w/>

ポケモン不思議のダンジョン 絆の探検記

2011年11月20日01時15分発行